

# 『全体新論』に掲載される解剖図の出典について

松本秀士<sup>1),2)</sup>, 坂井建雄<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>立教大学文学部 文芸・思想専修, <sup>2)</sup>順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学

受付:平成21年4月27日/受理:平成21年7月31日

**要旨:** 西洋の科学的解剖学を近代中国にもたらしたとして、これまで評価されてきたホブソンの『全体新論』には、当時の中国伝統の諸医書をはるかにしのぐ精美な解剖図が多数掲載されている。本稿では、『全体新論』の影響がおもに解剖図による視覚的なものであったことを焦点に、解剖図の出典を調査し、ウィルソン『人体解剖学体系』、およびカーペンター『動物生理学』が主要な出典であることをはじめて明らかにした。しかし、出典の解剖図が本来備えもつ重要な解剖学的意義の多くは、『全体新論』において切り捨てられていたと結論づけられる。中国近代医学史にとって『全体新論』の伝えた西洋解剖学は専門レベルのものではなく、あくまで概観に止まっており、ポピュラーサイエンスの水準での伝播を意図したものである。

**キーワード:** 『全体新論』, 解剖図, ウィルソン『人体解剖学体系』, カーペンター『動物生理学』, 中国近代医学史

## 0. はじめに

英国人医療宣教師ホブソン (Benjamin Hobson, 1816-1873, 中国名; 合信) が編纂した『全体新論』(1851) は、近代中国にはじめて西洋の解剖生理学を伝えたことで知られる。当時の中国における人体解剖に関する知識は、中国伝統医学独自の流れで受け継がれてきた五臓六腑を中心にしたものであった。王清任 (1768-1831) の著した『医林改錯』(王, 1830) には、明らかに従来よりも詳細に描かれた「親見臟腑図」が収録されており、中国伝統医学史上、新たな解剖学的展開の重要な第一歩であると今日に評価される<sup>1)</sup>。『医林改錯』は中国伝統医学で独自に論じられてきた臟腑説、あるいは経絡説を根本から否定する意図をもち、その意味においても中国における本格的な解剖学的追求の再開と位置づけることができる。経絡という中国伝統の概念上で論じられてきた臟腑説は、ようやく一つの大きな局面を迎えたといえよう。しかし、時代はすでに19世紀も中葉にさしかかろうとしており、純粹な解剖学の追求という側面で

比較すれば、すでに西洋との差は極めて大きなものとなっていた。王清任の「親見臟腑図」によって新たな解剖学的知識が加えられたのではあるが、依然として限られた内容であったことは、『医林改錯』本文でその図を説明するために駆使された解剖学的語彙をみることで明らかである<sup>2)</sup>。

西洋の医学書が翻訳・翻案によって本格的に中国にもたらされるのは、19世紀も後葉に至ってからのこととなる。『全体新論』はそれらに先駆ける刊行物であるがために普及度、および影響力は大きく、西洋医学をいち早く中国伝統医学の流れの中に取り込もうとした「中西医匯通派」と呼ばれる中国伝統の医家の一派が編纂した諸医書の多くには、『全体新論』に掲載される解剖図が引用されている<sup>3)</sup>。一方、先の王清任による「親見臟腑図」はこれ以前の「臟腑図」よりもやや詳しくなっているものの、西洋の解剖学書等から引用した『全体新論』の図と比較すれば、その差異は一目瞭然である。従って、そうした背景からも、『全体新論』に掲載される多数の解剖図が、視覚的な面で当時の中国に大きな反響をもたらしたこ

とがわかる。そのことを受けて、日本にも『全体新論』は輸入され、翻刻されるなどしてきた<sup>4)</sup>。

そのように、『全体新論』で最も重要な役割を果たしたのは、これに掲載される解剖図である。しかし、それにも係わらず、解剖図の出典については今日に至っても明らかにされてこなかった<sup>5)</sup>。一般に、『全体新論』は近代中国における西洋医学伝播の起点的存在とされてきており、その医史的意義を検討するという意味においても、解剖図の出典を明らかにすることは急務であり、本稿ではそのことを中心に論じたい。

## 1. 『全体新論』に掲載される解剖図の概略

『全体新論』を紹介する Wylie (1867) は、従来の研究で度々取り上げられてきた。そこには、『全体新論』初版本が折りたたみ式で7枚にわたるリトグラフによる解剖図を付したものであったこと、そして、それら7枚のリトグラフによる解剖図が後に木口木版画によって再編し直された上で、再版本として刊行された旨が記されている<sup>6)</sup>。今日の中国および日本各地の図書館に所蔵される『全体新論』は咸豊元年(1851)刊行とされるが、それらには咸豊三年(1853)につくる「賛」1丁があることから、実際は再版本であり、折りたたみ式の7枚にわたるリトグラフによる解剖図は一切みられない<sup>7)</sup>。そして、この再版本の例言にも、初版での解剖図はリトグラフによって刷られたものであったが、すこぶる雑になってしまったために木口木版画によって再編し直し、分類ごとに各編に分けた旨が述べられている<sup>8)</sup>。

『全体新論』再版本(1853)において、木口木版画による解剖図は、初版本の各丁を保ったままに挿入されており、そのことはそこに記される丁数をみることで確認することができる。後に日本で刊行された翻刻本等も、この再版本をもとにするものであり、折りたたみ式のリトグラフによる解剖図は一切含まない<sup>9)</sup>。現存する初版本は確認されていないが、咸豊三年につくる「賛」1丁を付し、リトグラフによる解剖図を織り込んだ版が、Harvard-Yenching Library に所蔵される<sup>10)</sup>。

リトグラフによる解剖図をもたない再版本『全

体新論』に掲載される木口木版画による解剖図は、合計22丁にわたって印刷されており、図数は212を数える<sup>11)</sup>。解剖図を印刷した各丁は各編の冒頭に挿入されており、その編の概要を提示するかたちとなっている。本文は24字×20行で合計71丁に渡るが、この内の末尾6丁には医学に関するものではなく、キリスト教に関する内容が記述される。冒頭には、序2丁・賛1丁・例言2丁・目録(目次)1丁があり、合計99丁から構成される。賛1丁は、咸豊三年(1853)に記されたものであり、これがあるものはつまり初版本ではなく再版本である。先の Wylie (1867) では99丁から構成されると説明されており、それは再版本『全体新論』を指すものであることがわかる。

以上をまとめると、『全体新論』初版本では、序2丁・例言2丁・目録(目次)1丁・本文71丁に、折りたたみ式の7枚にわたるリトグラフによる解剖図が付されていたと考えられるが、再版本では初版本に賛1丁および木口木版画による解剖図が印刷された22丁が加えられたものと、そこから折りたたみ式の7枚にわたるリトグラフによる解剖図が排除されたものが刊行されていたこととなる。

先述のように、今日の中国・日本の各図書館で所蔵が確認される『全体新論』はリトグラフによる解剖図が排除された再版本(1853)で、この版本は同じくホブソン編纂による『博物新編』(1855)、『西医略論』(1857)、『婦嬰新説』(1858)、および『内科新説』(1858)が加えられて『西医五種』(1858)としても刊行されている<sup>12)</sup>。従って、このリトグラフによる解剖図が排除された再版本『全体新論』は、近代中国においても最も広汎に読まれたと考えられること、また、民国三年(1914)にも全く同構成の重印本、および、石印本がそれぞれ刊行されていたことから、以下、本稿ではこの版本を考察対照として論じたい。

## 2. 『全体新論』に掲載される解剖図の出典について

ホブソンは『全体新論』序において、西洋の医学書を複数参照した旨を述べてはいるものの、具

体的な書名等、出典の特定につながるような説明は一切していない<sup>13)</sup>。しかし、前章で述べたように、『全体新論』に掲載される解剖図の出典は、遅くとも1853年までに刊行されたものに限られることとなる。そして、これまで取り上げられることのなかった *Medical Times and Gazette* (1859) には、『全体新論』の図の出典を大きく裏付ける記述がみられる。これによると、Carpenter (カーペンター) の名とその著書 “*Animal Physiology*” (『動物生理学』) があげられているのをはじめ、Quain (クエイン), Wilson (ウィルソン), および, Paley (ペイリー) の名が示されている<sup>14)</sup>。

カーペンターはすなわち William Benjamin Carpenter (1813–1885, 英) であり、『動物生理学』は *Popular cyclopaedia of natural science* のシリーズ本 (1841–1844) の一編として刊行されたもの (Carpenter, 1843) である<sup>15)</sup>。これには『全体新論』に掲載される解剖図に相当するものが多数みられる。

クエイン (Jones Quain, 1796–1865, 英) の著作としては『解剖学要論』(初版1828)<sup>16)</sup>、ならびに、ウィルソン (William James Erasmus Wilson, 1809–1884, 英) との共著で『解剖学図譜集』(初版1842) がある<sup>17)</sup>。クエインの弟 (Richard Quain, 1800–1887, 英) は『解剖学要論』第5版 (1843) の改訂を担当しているが、包括的な著作はない。クエインの『解剖学要論』は第4版 (1837) から木口木版画による解剖図が加えられ、『全体新論』の図に相当するものが多数みられる。しかし、後述するウィルソンによる『人体解剖学体系』にも同等の解剖図があり、クエインの『解剖学要論』にのみある解剖図については『全体新論』では一切掲載されていない。このことから、クエインの『解剖学要論』は出典ではないと判断される。一方、ウィルソンとの共著『解剖学図譜集』には、いくつかの該当する解剖図がみられた。

ウィルソンはすなわち前出の William James Erasmus Wilson であり、主要な解剖学関係の著作には『解剖学者必携』(初版1840) がある<sup>18)</sup>。そのアメリカ版『人体解剖学体系』に該当する解剖図が多数あり、中でも1851年版で最も多くの一

致をみた<sup>19)</sup>。

ペイリー (William Paley, 1743–1805, 英) については、『自然神学』の一部の版に図が付されており、その中の解剖図に『全体新論』と一致するものがみられる。図を付した版にはベル (Charles Bell, 1774–1842, 英), ブルーム (Henry Lord Brougham, 1778–1868, 英) 共編のもの、パクストン (James Paxton, 1786–1860, 英) 編のものがある。ベル編には各版があるが、掲載される解剖図で判断する限り1845年のロンドン版で最も良く一致をみた<sup>20)</sup>。パクストン編にも各版があり、同様に判断して1837年版での描かれ方が最も近かった<sup>21)</sup>。

以上、カーペンターによる『動物生理学』をはじめ、クエインとウィルソンとの共著による『解剖学図譜集』、ウィルソンによる『人体解剖学体系』、ペイリーによる『自然神学』のベル、ブルーム共編版、および同パクストン編版は、『全体新論』に掲載される解剖図の出典としてほぼ確実であると判断されるため、以下「A群」に分類して論じる。

しかし、『全体新論』では明らかにそれら以外の複数の書からも図が引用されている。そのため、『全体新論』再版本が咸豊三年 (1853) につくる「贅」をもつことを手がかりにして、筆者は1853年以前に出版された解剖学、医学、生物学、および自然科学等の各書で、図が掲載されているものを中心に探索した。以下、筆者の行った同定作業により推定できた解剖図の出典を表1に示した。なお、同定根拠の違いにより原典を分類し、他に同様の図がみられなかったために出典としたものを「B群」とした。「B群」には、Cheselden (1763), Wardrop (1808), Bell, Bell (1809), Cloquet (1825), Arnott (1831), Davis (1836), Paxton (1837b), Hooper (1842), Yeoman (1851), Cruveilhier (1853) が含まれる。同様の図が他の著作にもみられるが、該当する図が多く掲載されていることから出典であると判断したものを「C群」と分類した。「C群」には Jones (1841), Solly (1847), Jones (1847), Dunglison (1850) が含まれる。「B群」については、これを引用する他の著作を出典とする可能性はあるが、少なくともその図の原典的存在であり、こ

表1 『全体新論』解剖図の出典一覧

分類	編著者(刊行年)	書名	略号	図印刷
A群	Carpenter WB (1843)	Animal physiology	Carpenter	木口木版画
	Quain J, Wilson WJE (1842)	A series of anatomical plates	Quain-Wilson	リトグラフ
	Wilson WJE (1851)	A system of human anatomy	Wilson	木口木版画
	Paley W, Paxton J (1837)	Paley's theology, with illustrations	Paley-Paxton	リトグラフ
	Bell C, Brougham HL (1845)	Paley's natural theology; with illustrative notes	Paley-Bell	木口木版画
B群	Cheselden W (1763)	The anatomy of the human body	Cheselden	銅版画
	Wardrop J (1808)	Essays on the morbid anatomy of the human eye	Wardrop	リトグラフ
	Bell J, Bell C (1809)	The anatomy of the human body	Bell	銅版画+木口木版画
	Cloquet J (1825)	Manuel d'anatomie descriptive du corps humain	Cloquet	リトグラフ
	Arnott N (1831)	Elements of physics	Arnott	木口木版画
	Davis DD (1836)	The principles and practice of obstetric medicine	Davis	リトグラフ
	Paxton J (1837)	An introduction to the study of human anatomy	Paxton_anat	木口木版画
	Hooper R (1842)	Physician's vade mecum	Hooper	木口木版画
	Yeoman TH (1851)	The people's medical journal, and family physician	Yeoman	木口木版画
	Cruveilhier J, Pattison GS (1853)	The anatomy of the human body	Cruveilhier	木口木版画
C群	Jones TR (1841)	A general outline of the animal kingdom	Jones R	木口木版画
	Solly S (1847)	Human brain : its structure, physiology and diseases	Solly	木口木版画
	Jones TW (1847)	A manual of the principles and practice of ophthalmic medicine and surgery	Jones W	木口木版画
	Dunglison R (1850)	Human physiology	Dunglison	木口木版画
	D群	Smellie W (1757)	Tabulae anatomicae	Smellie
Hunter W (1774)		Anatomia uteri humani gravidi tabulis illustrata	Hunter	銅版画
Conquest JT, Winn JM (1854)		Dr. Conquest's outlines of midwifery	Conquest	木口木版画

の意味において重要である。

さらに、出典は不詳であるが特に重要ないくつかの解剖図については、描かれ方に顕著な異同がある場合でも、別の出典を通すなどして間接引用となった可能性があるかと判断されるものを、今後の検討のための参考資料として「D群」に分類して示した。「D群」にはSmellie (1757), Hunter (1774), Conquest, Winn (1854) が含まれる。

また、詳細は本稿第3章で述べるが、医史的

背景から各出典にある解剖図の印刷方法に重要な意味があるために、これについても併せて表1の中に示した。なお、以下本稿で各出典を論じる場合は、表1に示した略称を用いた。

次の表2には各丁に描かれる解剖図の概要とその図数を示すとともに、丁ごとに各出典から引用された図の数を明らかにしておく<sup>22)</sup>。表2で明らかかなように、『全体新論』に掲載される解剖図の最も主要な出典はウィルソンによる『人体解剖学

表2 『全体新論』丁ごとの解剖図数、および出典一覧

丁	解剖学分類	図 総 数	A群		B群				C群				不 詳	
			Carpenter	Quain-Wilson	Wilson	Pailey	Bell	Cruveilhier	その他	Jones R	Solly	Jones W		Dunglison
一甲	骨格系	2							2					
一乙	骨格系	12			12									
一丙	骨格系	12			11	1								
十甲	骨格系	19	5		9	1						1	3	
十乙	骨格系	10	2							5			3	
十六甲	筋系	6			1			4	1					
十六又甲	神経系	12	8		2						2			
十六乙	神経系	10		2	2			1			2		3	
二十二甲	視覚器系	14			5	1	2					1	5	
二十二乙	視覚器系	12		1					1	2		4	4	
三十一	聴覚器系	11	2	1	1	1			2	2			3	
三十四	その他感覚器系	18	4	1	2			1	1			2	7	
三十八甲	消化器系	8	1		3			3					1	
三十八乙	消化器系	8	2		4				2			1		
四十六甲	循環器系	7	1		2		1	2	1					
四十六乙	循環器系	13	3		5		2	2				1		
四十六丙	循環器系	2		1		1								
五十二	循環器系	7	1	1	6									
五十七	泌尿器&男性生殖器	11			7			2					2	
六十甲	女性生殖器&産科	14			1		3	1	2			3	4	
六十乙	産科&胎児	2											2	
六十丙	産科&胎児	2											2	
	合計	212	29	7	73	5	10	14	12	9	4	4	9	39

体系』であり、次いでカーペンターによる『動物生理学』である<sup>23)</sup>。

次の表3には、『全体新論』に掲載される解剖図ごとにその出典を示した。先述のA~D群の分類に加えて、図の描かれ方に応じて次のように区分けした。図に左右反転の異同があるもの、または描写の上で主要ではない細かな線等の省略が僅かにみられるが、図の輪郭に影響を与えるほどではないものについては「(プライム)」を付して

「A'」「B'」「C'」とし、省略される線の度合いが明らかに多く、それに応じて図の輪郭の一部に異同がみられるものについては「" (ダブルプライム)」を付して「A''」「B''」「C''」とした<sup>24)</sup>。なお、以上の同定作業で参照した1853年までの各書の全般的な特徴として、特に1830年代以後のものに、他書からの解剖図を転用する傾向があげられ、そのために、図が一致する、あるいは類似するというだけで出典であると断定しきれない面がある。特

表3 『全体新論』各解剖図の出典詳細一覧

丁	図整理番号	図名称	出典	出典ランク
一甲オ	01A-a01	正面人骨図	Arnott	B
一甲ウ	01A-b01	嬰孩骨格図	Cheselden	B'
一乙オ	01B-a01	首節頸骨図	Wilson	A
	01B-a02	次節頸骨図	Wilson	A
	01B-a03	頸骨図	Wilson	A
	01B-a04	背骨図	Wilson	A
	01B-a05	尾骶骨図	Wilson	A
	01B-a06	腰骨図	Wilson	A
一乙ウ	01B-b01	額骨外形図	Wilson	A
	01B-b02	額骨内形図	Wilson	A
	01B-b03	枕骨外形図	Wilson	A
	01B-b04	枕骨内形図	Wilson	A
	01B-b05	耳門骨内図	Wilson	A
	01B-b06	耳門骨外図	Wilson	A
一丙オ	01C-a01	正面髑髏図	Wilson	A
	01C-a02	左右〔骨廬〕頂骨図	Paley-Bell	A
	01C-a03	上牙床骨図	Wilson	A
	01C-a04	下牙床骨図	Wilson	A
	01C-a05	鼻中上水泡骨図	Wilson	A
	01C-a06	蝴蝶骨図	Wilson	A
一丙ウ	01C-b01	横割頭顱見盛脳骨図	Wilson	A
	01C-b02	反看髑髏之底図	Wilson	A
	01C-b03	肩〔骨甲〕骨図	Wilson	A
	01C-b04	胸脇骨図	Wilson	A
	01C-b05	膀骨図	Wilson	A
	01C-b06	尻骨盤図	Wilson	A
十甲オ	10A-a01	上臂骨図	Wilson	A
	10A-a02	正肘骨転肘骨	Wilson	A
	10A-a03	指掌骨図	Wilson	A
	10A-a04	腕骨図	Wilson	A
	10A-a05	大腿骨図	Wilson	A
	10A-a06	小腿骨転腿骨前形	Wilson	A
	10A-a07	脚掌骨図	Wilson	A
	10A-a08	大腿骨図後形	Wilson	A
	10A-a09	転腿骨小腿骨後形	Wilson	A

丁	図整理番号	図名称	出典	出典ランク
十甲ウ	10A-b01	大人各牙図	不詳	
	10A-b02	小児牙図（〔齒産〕骨）	Carpenter	A
	10A-b03	小児牙図（小児牙床）	不詳	
	10A-b04	虎類／食肉之牙	Carpenter	A
	10A-b05	象牙／食草之牙	不詳	
	10A-b06	虎類大牙	Paley-Bell	A
	10A-b07	食虫之牙	Carpenter	A
	10A-b08	食果之牙	Carpenter	A
	10A-b09	食穀豆之牙	Carpenter	A
	10A-b10	脊骨図	Dunglison	C
十乙オ	10B-a01	鱈魚骨長二十尺	Jones R	C
	10B-a02	鯨魚骨長五十尺	Jones R	C
	10B-a03	猩々骨格	Jones R	C
	10B-a04	象足骨	不詳	
	10B-a05	馬足骨	Jones R	C
十乙ウ	10B-b01	大鷹骨	Carpenter	A
	10B-b02	駱駝骨	Carpenter	A
	10B-b03	鹿骨	Jones R	C
	10B-b04	虎頭骨	不詳	
	10B-b05	虎爪骨	不詳	
十六甲オ	16A-a01	手肉図	Cruveilhier	B
	16A-a02	足肉図割浅	Cruveilhier	B
	16A-a03	身肉図	Cruveilhier	B
	16A-a04	手筋帯図	Wilson	A
	16A-a05	足肉図割深	Cruveilhier	B
十六甲ウ	16A-b01	勇士闘力図	Cheselden	B
十六又甲オ	16AA-a01	横割大脳見当中相連図	Wilson	A
	16AA-a02	横割大脳見左右水房図	Wilson	A
	16AA-a03	当面破辺脳部図	Carpenter	A
	16AA-a04	駝鳥脳図	Carpenter	A
	16AA-a05	鰻鱺脳図	Solly	C
	16AA-a06	虫脳珠図	Carpenter	A
	16AA-a07	鬆鼠脳図	Solly	C
十六又甲ウ	16AA-b01	週身脳気筋図	Carpenter	A
	16AA-b02	白人頭殻	Carpenter	A
	16AA-b03	黒人頭殻	Carpenter	A
	16AA-b04	猴子頭殻	Carpenter	A
	16AA-b05	猪頭殻	Carpenter	A

丁	図整理番号	図名称	出典	出典ランク
十六乙オ	16B-a01	反転脳底之形図	Cruveilhier	B
	16B-a02	脳頂図	不詳	
	16B-a03	脳内形図	Quain-Wilson	A
	16B-a04	破辺脳枚図	Wilson	A
	16B-a05	頭部脳気筋図	Wilson	A
十六乙ウ	16B-b01	脊髓前後根図	Solly	C
	16B-b02	横割一片所見如此	Solly	C
	16B-b03	手部脳気筋并脉管図	不詳	
	16B-b04	脳連脊髓之形図	Quain-Wilson	A
	16B-b05	足後脳気筋并脉管図	不詳	
二十二甲オ	22A-a01	人眼同此大	不詳	
	22A-a02	展割眼簾	不詳	
	22A-a03	目系本源図	Wilson	A
	22A-a04	近視眼図	不詳	
	22A-a05	遠視眼図	不詳	
	22A-a06	樹形透凸鏡図	不詳	
	22A-a07	箭形透近視眼図(凹鏡無)	Bell	B
	22A-a08	箭形透近視眼図(凹鏡有)	Bell	B
二十二甲ウ	22A-b01	眼側面図	Dunglison	C''
	22A-b02	眼胞肉図	Paley-Paxton	A''
	22A-b03	涙核涙管図	Wilson	A
	22A-b04	眼窠七肉図	Wilson	A
	22A-b05	当面破辺眼球図	Wilson	A
	22A-b06	側面破辺眼球図	Wilson	A
二十二乙オ	22B-a01	直割眼球図	Quain-Wilson	A''
	22B-a02	虫類眼睛図	不詳	
	22B-a03	魚眼図	Jones R	C''
	22B-a04	鷹眼図	Jones R	C'
二十二乙ウ	22B-b01	睛珠変質図	Jones W	C'
	22B-b02	鍼下眼睛図	Jones W	C''
	22B-b03	眼簾熱症図	不詳	
	22B-b04	外膜遮睛図	Jones W	C'
	22B-b05	[奴月]肉扳睛図	不詳	
	22B-b06	明罩変凸図	Jones W	C'
	22B-b07	[目藪]毛倒挿図	不詳	
	22B-b08	明罩生尖図	Wardrop	B



丁	図整理番号	図名称	出典	出典ランク
三十一オ	31-a01	攪気試声図	不詳	
	31-a02	耳骨図	Quain-Wilson	A
	31-a03	耳骨部位図	Wilson	A
	31-a04	直割耳骨見各部位図	Carpenter	A
三十一ウ	31-b01	耳内四小骨図	Carpenter Cloquet	A" B'
	31-b02	鱗鱗類耳骨図	Jones R	C
	31-b03	兔聴声図	不詳	
	31-b04	耳内竅骨図	Cloquet	B
	31-b05	鳥耳骨図	Jones R	C
	31-b06	人耳内四小骨相連図	Paley-Bell	A
	31-b07	狸聴声図	不詳	
三十四オ	34-a01	鼻脆骨図	Quain-Wilson	A
	34-a02	鼻下水泡骨図	不詳	
	34-a03	横割見鼻図	Dunglison	C''
	34-a04	象鼻図	Carpenter	A
	34-a05	象指掇物 象鼻飲水	不詳	
	34-a06	拾掇小物獸類不能	不詳	
	34-a07	人手能拾掇図	Yeoman	B''
	34-a08	猩猩手図	Carpenter	A
	34-a09	巨葬救人図大雪天時	不詳	
三十四ウ	34-b01	舌内脳筋脉管図	不詳	
	34-b02	蜜舌採花図	Carpenter	A
	34-b03	螺舌	Carpenter	A''
	34-b04	人舌図	Wilson	A
	34-b05	蛇舌図	不詳	
	34-b06	麋鹿図	不詳	
	34-b07	髮管図	Cruveilhier	B'
	34-b08	汗孔図	Dunglison	C''
	34-b09	皮内之形図	Wilson	A
三十八甲オ	38A-a01	当面破辺臉頰図 (割浅)	Carpenter	A
	38A-a02	当面破辺臉頰図 (割深)	Cruveilhier	B''
	38A-a03	横面破辺頰部図 (未開)	Cloquet	D
	38A-a04	横面破辺頰部図 (割開)	Wilson	A
三十八甲ウ	38A-b01	剖前身見臟腑図	Cruveilhier	B
	38A-b02	剖割背腹図	Cruveilhier	B
	38A-b03	破辺胃経図	Wilson	A
	38A-b04	剖割闌門図	Wilson	A

丁	図整理番号	図名称	出典	出典ランク
三十八乙オ	38B-a01	張口図	Dunglison	C
	38B-a02	小腸吸液管運行図	Wilson	A''
			Carpenter	A'
	38B-a03	正面臓腑部位図	Hooper	B''
38B-a04	背面臓腑部位図	Hooper	B''	
三十八乙ウ	38B-b01	脾胃肝腸脉管図	Wilson	A
	38B-b02	膈下臓腑図	Carpenter	A
	38B-b03	腸部脉管図	Wilson	A
	38B-b04	剖腹見臓図	Wilson	A
四十六甲オ	46A-a01	心経衆管図	Bell	B
	46A-a02	心血運行図	Wilson	A
	46A-a03	心左房門図	Paxton_anat	B'
四十六甲ウ	46A-b01	血脉総管図	Cruveilhier	B
	46A-b02	全体脉管図	Carpenter	A
	46A-b03	下部各回血管入肝化生胆汁図	Wilson	A
	46A-b04	面部頸部脉管図	Cruveilhier	B
四十六乙オ	46B-a01	手部脉管図	Cruveilhier	B
	46B-a02	脚面脉管図	Wilson	A
	46B-a03	足後血脉管図	Wilson	A
	46B-a04	大腿脉管図	Wilson	A
	46B-a05	廻血管門図	Cruveilhier	B
	46B-a06	脚底脉管図	Wilson	A
四十六乙ウ	46B-b01	血脉総管三門図	Bell	B
	46B-b02	将三門割開所見如此	Bell	B'
	46B-b03	臀部脉管図	Wilson	A
	46B-b04	蛤脚膜血管図	Carpenter	A
	46B-b05	血輪運行図	Carpenter	A
	46B-b06	衆血運行図	Dunglison	C''
	46B-b07	心内四房図	Carpenter	A
四十六丙オ	46C-a01	週身血脉管図	Quain-Wilson	A'
四十六丙ウ	46C-b01	破辺心部図	Paley-Bell	A'
五十二オ	52-a01	週身血脉総管図	Wilson	A'
			Wilson	A'
	52-a02	脳底脉管図	Wilson	A
52-a03	頸脉管上行図	Wilson	A	

丁	図整理番号	図名称	出典	出典ランク
五十二ウ	52-b01	肺中三管図	Quain-Wilson	A
	52-b02	肺経気管図	Carpenter	A
	52-b03	脉管由心上行図	Wilson	A
	52-b04	心肺総管図	Wilson	A
五十七オ	57-a01	直割内腎図	Wilson	A
	57-a02	内腎血管図	不詳	
	57-a03	内腎生尿管	Wilson	A
	57-a04	横割外腎図	Wilson	A
	57-a05	直割外腎図	Wilson	A
	57-a06	破辺陽物図	Wilson	A
五十七ウ	57-b01	小腹内臓図	Wilson	A
	57-b02	膀胱図	不詳	
	57-b03	破辺膀胱蒂図	Wilson	A
	57-b04	小腸疝図	Bell	B
	57-b05	水疝図	Bell	B
六十甲オ	60A-a01	子宮図	Cruveilhier	B
	60A-a02	十五日胚胎図	Bell	B
	60A-a03	孕四十日子宮図	Bell	B
	60A-a04	十二日胚珠（未割）	不詳	
	60A-a05	十二日胚珠（割開）	不詳	
	60A-a06	二十一日胚	不詳	
	60A-a07	四十五日	Dunglison	C'
	60A-a08	六十日成形	Dunglison	C'
	60A-a09	四月胎胞図	Cloquet	D
六十甲ウ	60A-b01	剖験子管図	Davis	B
	60A-b02	足月胎図	Dunglison	C''
	60A-b03	破辺小腹図	Wilson	A
	60A-b04	全個子宮	Bell	B
	60A-b05	破辺子宮図	Davis	B''
六十乙オ	60B-a01	足月孕婦図	Hunter	D
六十乙ウ	60B-b01	嬰兒臍帯胎盆図	Cloquet	D
六十丙オ	60C-a01	足月仔胎図	Smellie	D
六十丙ウ	60C-b01	横生図	Conquest	D

にB群、およびC群については、それが出典であることを示す史料は見いだせておらず、絶対的な出典ではない可能性もあり得ることを断っておきたい。

次頁以降には、『全体新論』に掲載される各解剖図と、本稿で明らかにした出典の解剖図を示した。『全体新論』に掲載される各解剖図には、先の表3で付した整理番号を示した。以下、本稿で『全体新論』に掲載される各解剖図を論じる場合には、この整理番号を用いた。

### 3. 『全体新論』に掲載される解剖図にみる 医史学的問題

『全体新論』に掲載された図は、おもに19世紀前半の解剖学書であり、そこに収録されていた図版は、一部の銅版画およびリトグラフによるものを除いて、大半は木口木版画によるものである。前章で示したように、ウィルソンの『人体解剖学体系』とカーペンターの『動物生理学』からの図が『全体新論』の図のほぼ半数近くを占めており、両書が最大の典拠であるが、両書ともに木口木版画による図を用いていることには注意が必要である。

西洋において木口木版画は19世紀になって登場した新しい版画技術であり、本文と同じ紙面に図を印刷することを可能にした。それまでの西洋における解剖図に多用されていた凹版による銅版画、平版によるリトグラフでは、凸版で印刷される本文と版の高さおよび印刷の際の圧の違いにより、同じ紙面に印刷をすることが不可能であった。西洋における木口木版画の登場は、本文と図を同じ紙面に配置し、両者を関連づけて有機的な編集を可能にしたのである。そして、1830年代以降にはほとんどの解剖学書、あるいは生理学書等で、木口木版画による解剖図の特性を活用した編集がされるようになり、そのことが西洋において極めて重要な医史学的特徴を醸し出している<sup>25)</sup>。

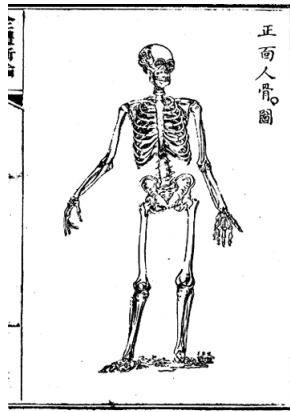
一方、『全体新論』ではウィルソンの『人体解剖学体系』等に掲載される木口木版画による解剖図だけでなく、その他の著作からの木口木版画によらないリトグラフ等の解剖図も併せて同一の丁に集められている(各出典に掲載される図の印刷

方法については前章表1参照)。そして、本文については改訂の手が加わらないままに、ただ単に各編の冒頭に解剖図を集めた丁が挿入されている。従って、本来の木口木版画による解剖図が有していたはずの本文との有機的結合は、『全体新論』において活かされることはなく、必然的に失われてしまったこととなる。

また、ウィルソンによる『人体解剖学体系』をはじめ、出典となった著作に印刷される木口木版画による解剖図では、多くの場合、詳細な部位名が併記されている。参照されるべき図が本文の中に嵌め込まれ、本文中では参照すべき図の番号が言及され、さらに図中の部位名が本文の理解を助けている。こういった本文と図を関連づけた高度な編集の助けにより、解剖学の膨大で詳細な情報は、読者にとってより理解しやすいものとなるのである。図との関連づけがなければ、解剖学の詳細な記述は無味乾燥なものになってしまう。それに対して『全体新論』では、出典の図にあった部位名の多くが省略されていて、出典の多くの図にある本来の意図は失われてしまっている。ましてや『全体新論』で説明される内容は、中国にとって全く新しい概念を多々含むものであり、それを正確に伝えようとする明確な意志があるならば、そうした省略は避けていたはずである。図が本文と別葉に印刷されたこととあいまって、『全体新論』の内容が簡略なものに終わった一因であると考えられる。

中国ではすでに明代において、本文と図とを同じ紙面に印刷してそれらを有機的に編集した医学書は刊行されており、その状況は清代においても同様である<sup>26)</sup>。『全体新論』においてもたとえば46C-a01、および46C-b01等のごく一部の解剖図には、それに対する説明文が併記されており、ウィルソンによる『人体解剖学体系』と同様に、解剖図に対して有機的な論述を構成していくことは充分可能であったことが伺える。しかし、ホブソンはそれにも係わらず、当時の西洋における最新の解剖学書等の形式を反映させることなく『全体新論』を編纂したのである。つまり、ホブソンが『全体新論』を通して近代中国にもたらした西洋の解

『全体新論』各解剖図と出典との比較



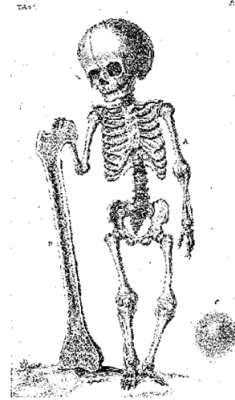
01A-a01



一甲才



01A-b01



一甲ウ

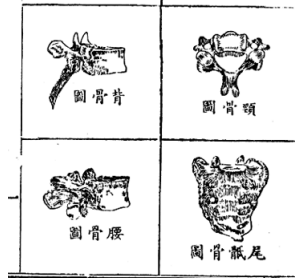
01B-a02



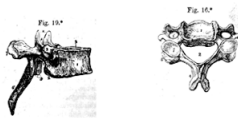
01B-a01



01B-a04



01B-a03



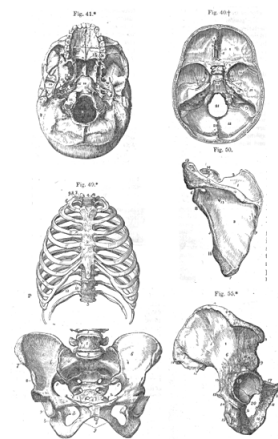
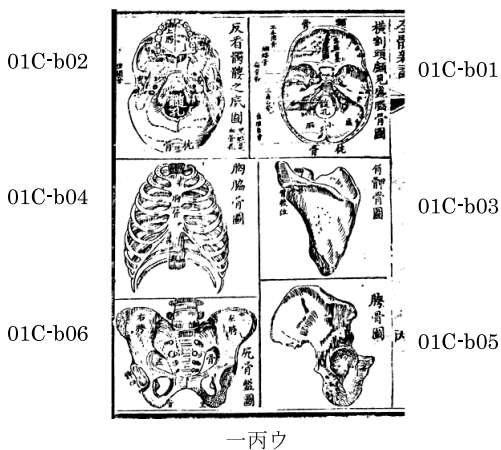
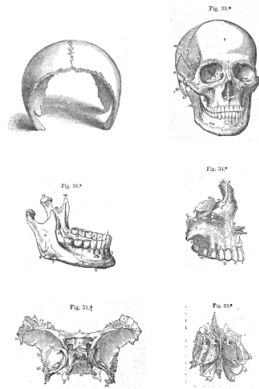
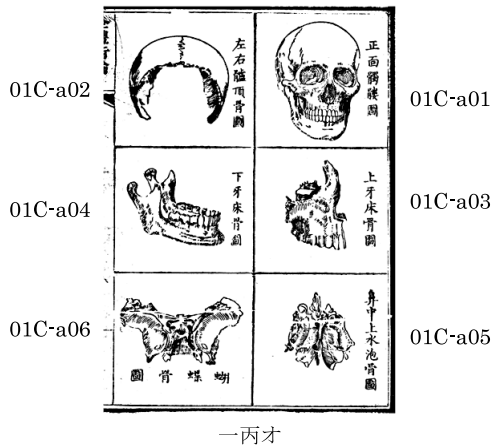
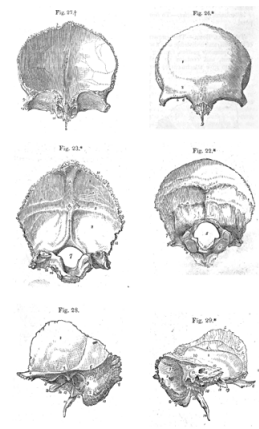
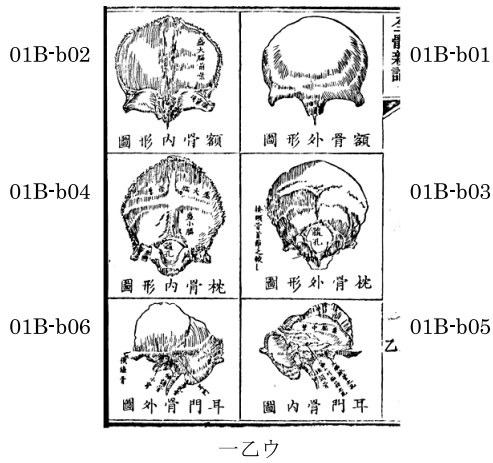
01B-a06

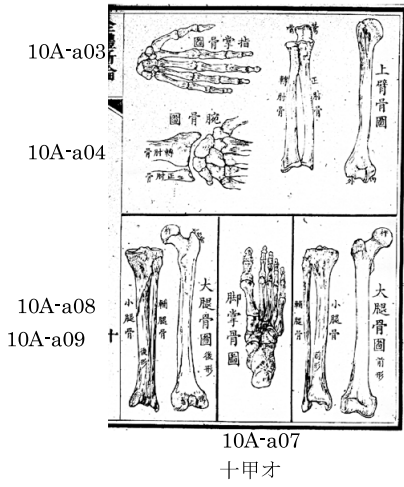


01B-a05

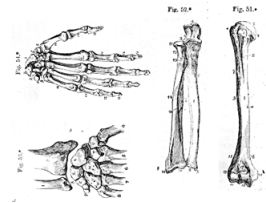


一乙才

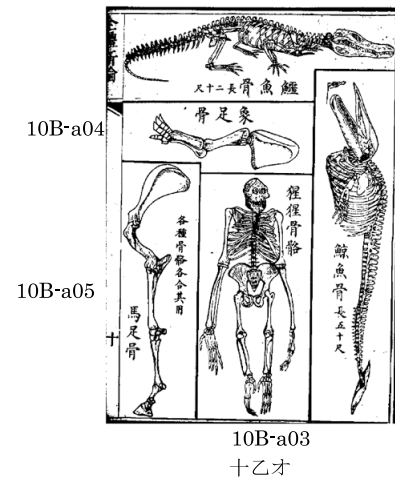
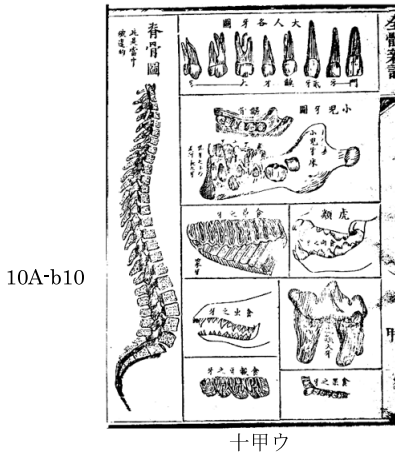
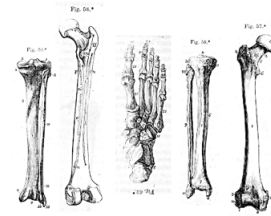




10A-a01  
10A-a02



10A-a05  
10A-a06



10B-a01

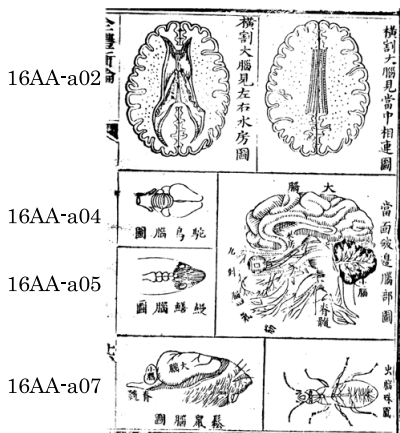


10B-a02







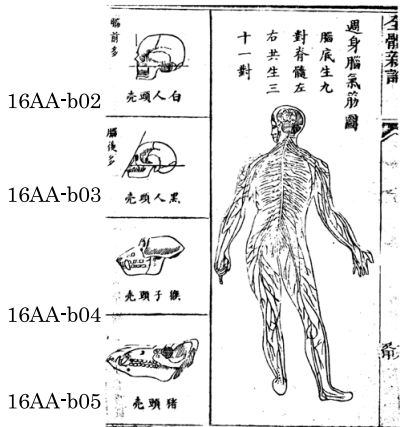
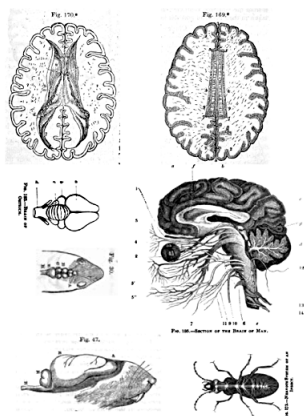


16AA-a01

16AA-a03

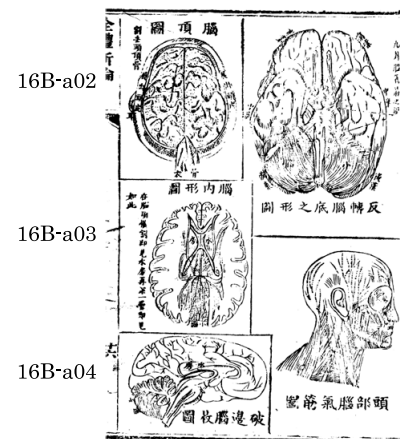
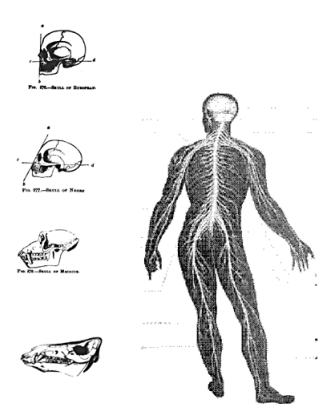
16AA-a06

十六又甲オ



16AA-b01

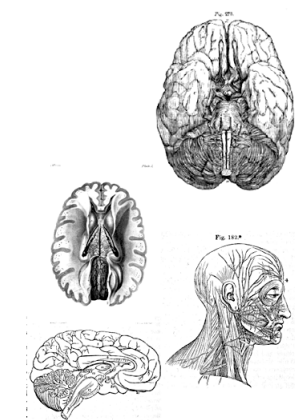
十六又甲ウ

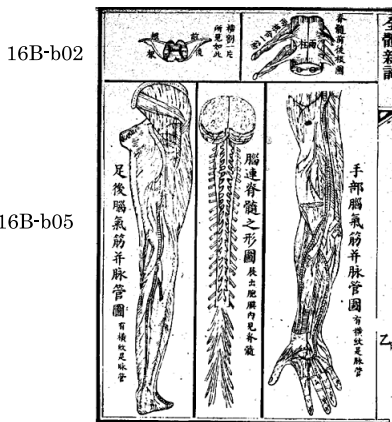


16B-a01

16B-a05

十六乙オ





16B-b02

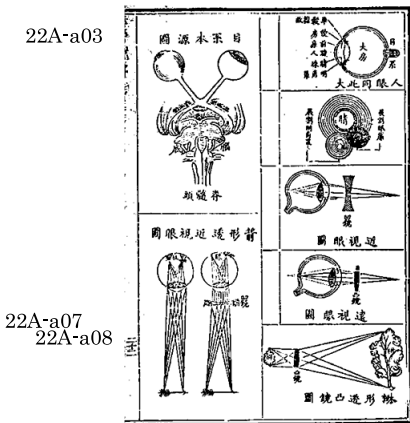
16B-b05

16B-b04

十六乙ウ

16B-b01

16B-b03



22A-a03

22A-a07  
22A-a08

二十二甲才

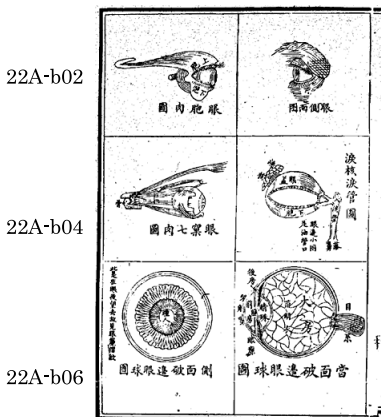
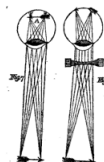
22A-a01

22A-a02

22A-a04

22A-a05

22A-a06



22A-b02

22A-b04

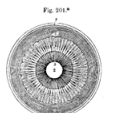
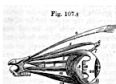
22A-b06

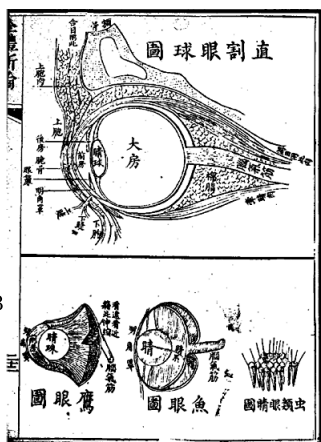
二十二甲ウ

22A-b01

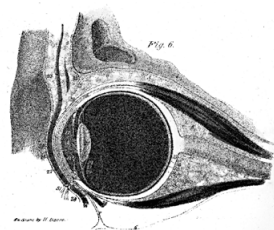
22A-b03

22A-b05





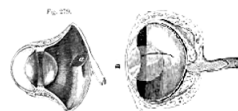
22B-a01



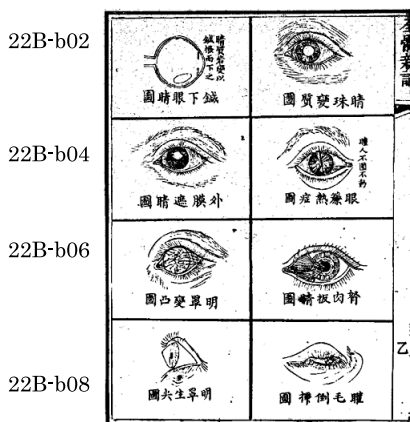
22B-a03  
22B-a04



22B-a02



二十二乙オ



22B-b02

22B-b01

22B-b04

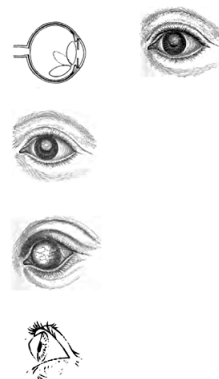
22B-b03

22B-b06

22B-b05

22B-b08

22B-b07



二十二乙ウ

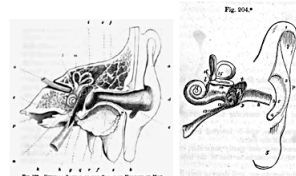


31-a02

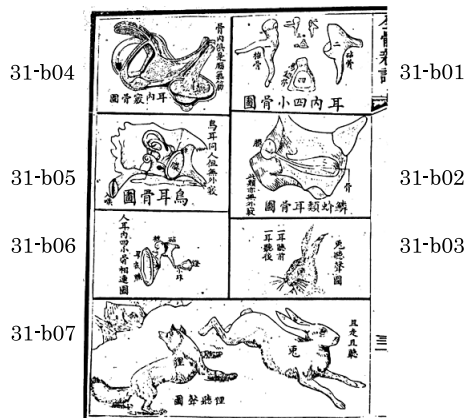
31-a01

31-a04

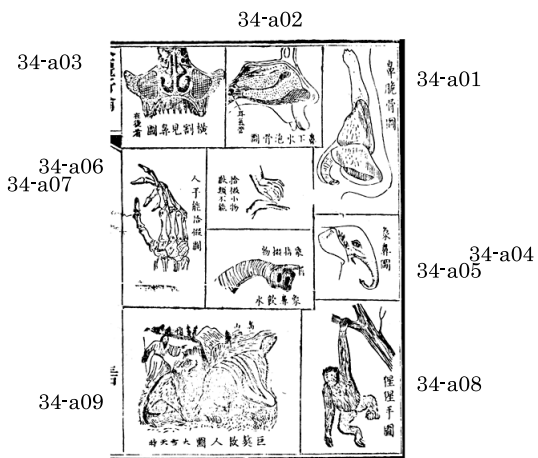
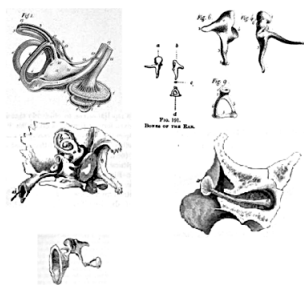
31-a03



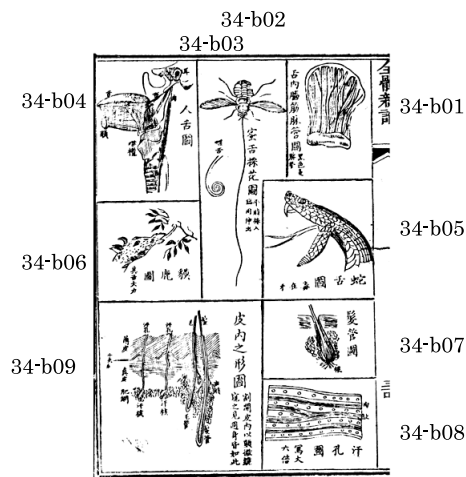
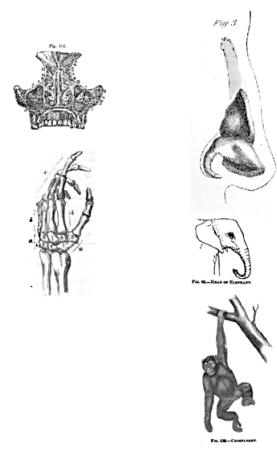
三十一才



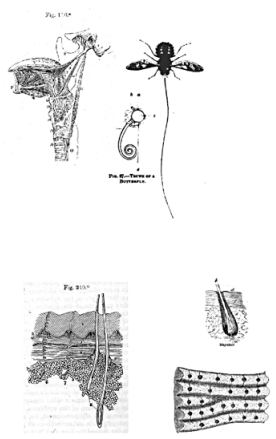
三十一ウ

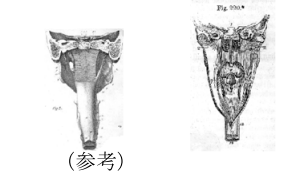
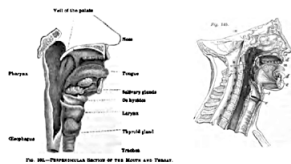
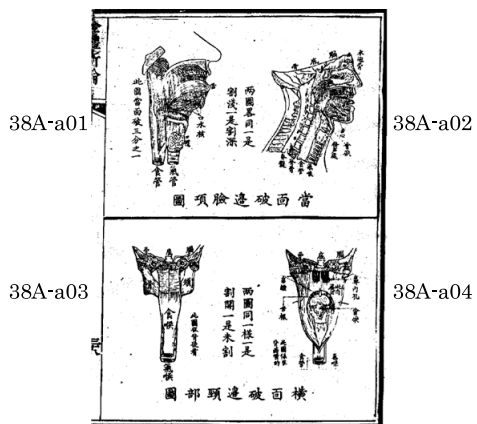


三十四才

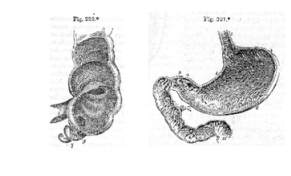
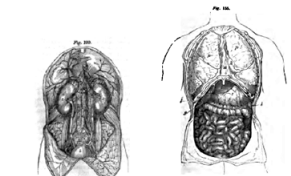
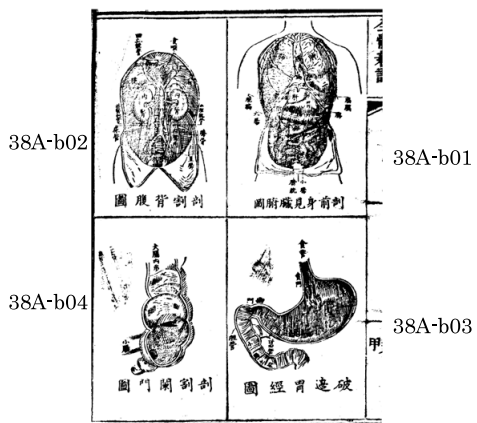


三十四ウ

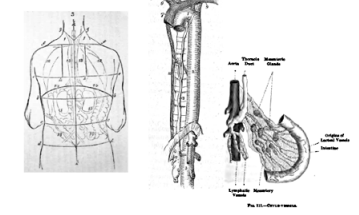
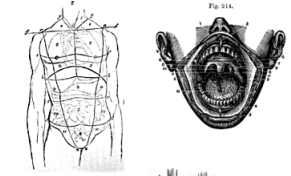
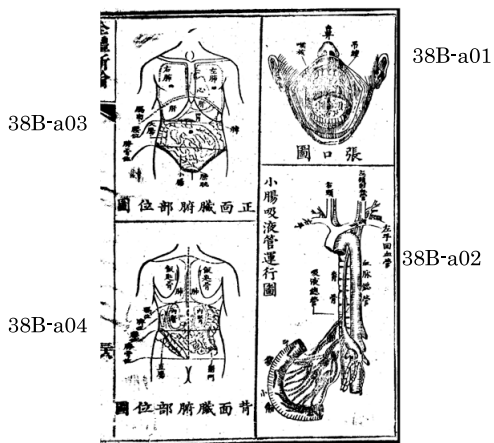




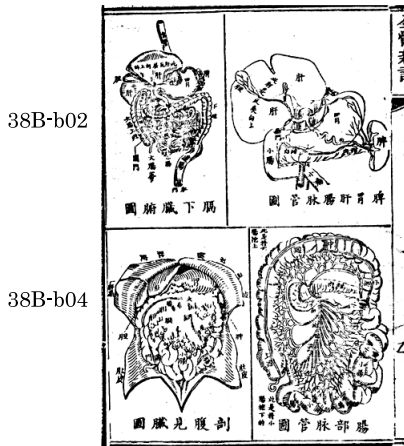
三十八甲オ



三十八甲ウ



三十八乙オ



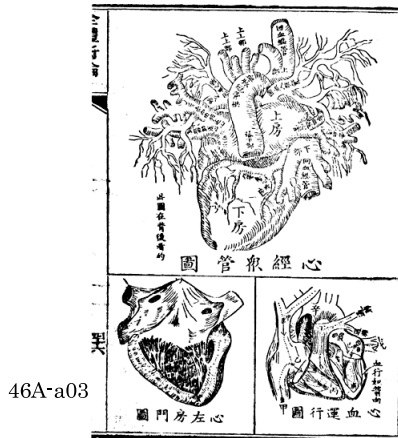
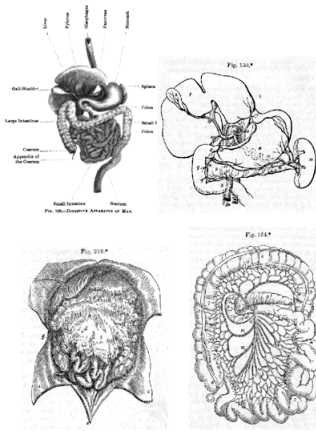
38B-b02

38B-b01

38B-b04

38B-b03

三十八乙ウ

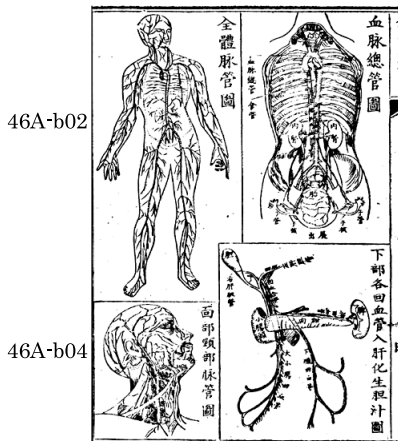
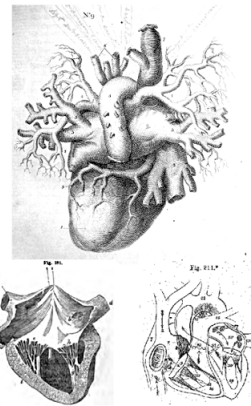


46A-a03

46A-a01

46A-a02

四十六甲才



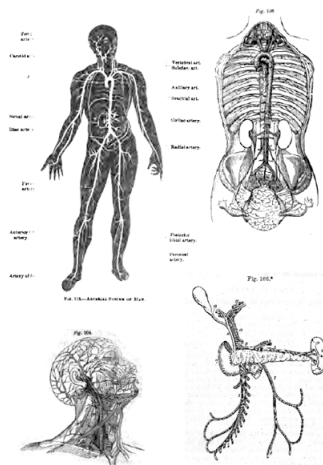
46A-b02

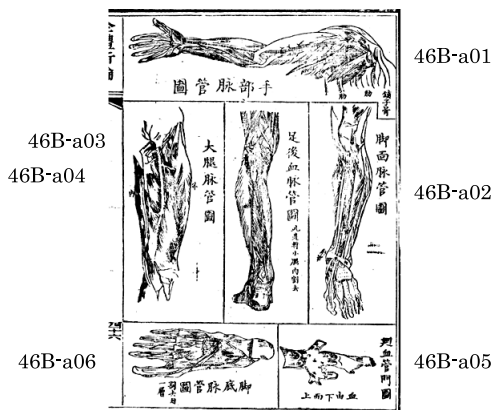
46A-b01

46A-b04

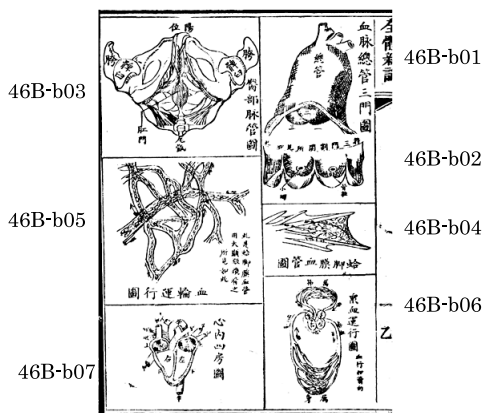
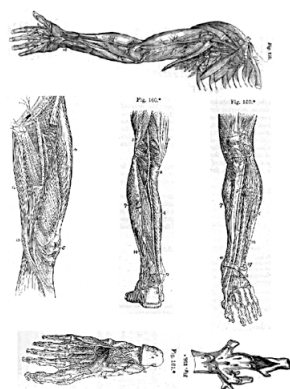
46A-b03

四十六甲ウ

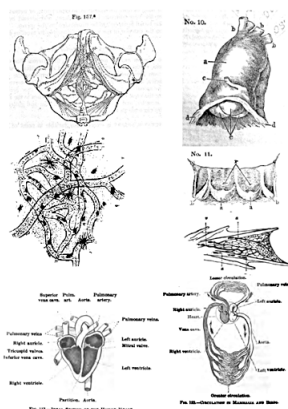




四十六乙オ



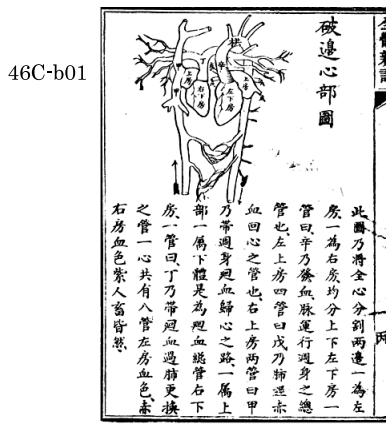
四十六乙ウ



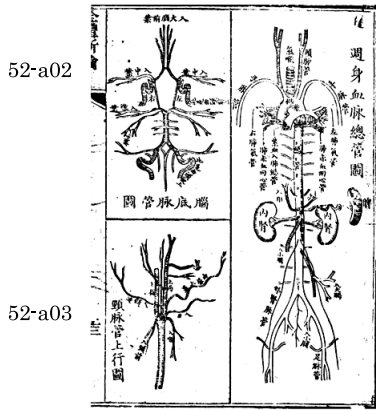
四十六丙オ



46C-a01

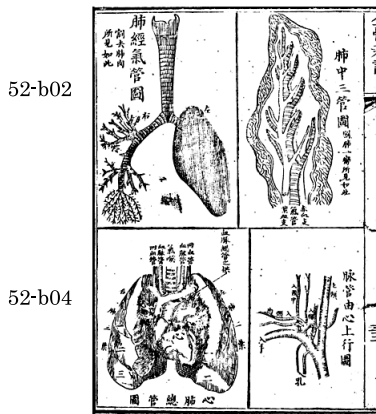
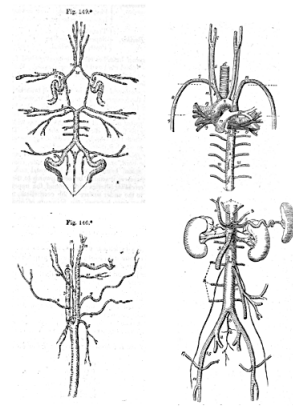


四十六丙ウ



五十二才

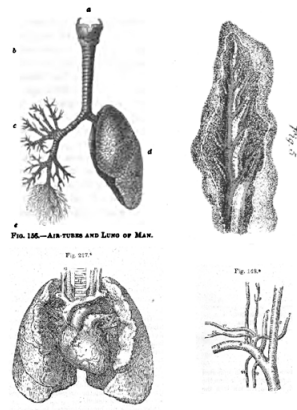
52-a01



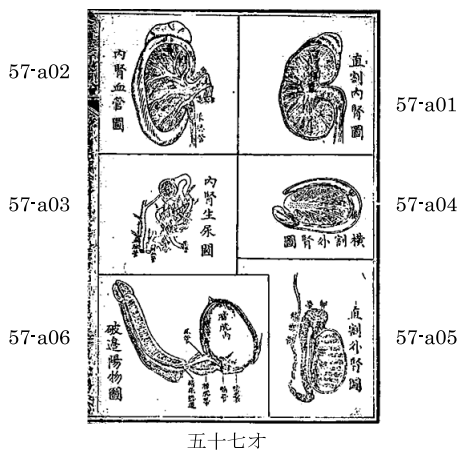
五十二ウ

52-b01

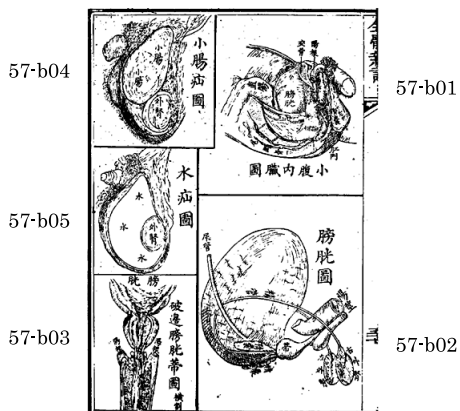
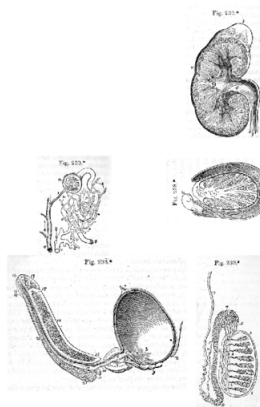
52-b03



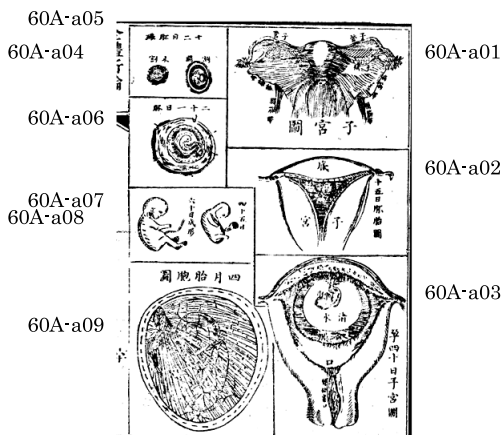
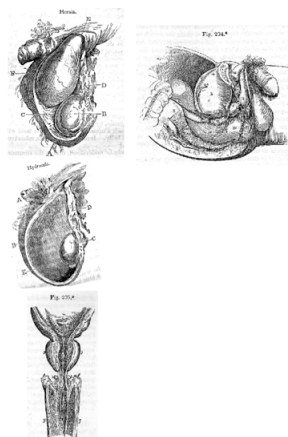




五十七才



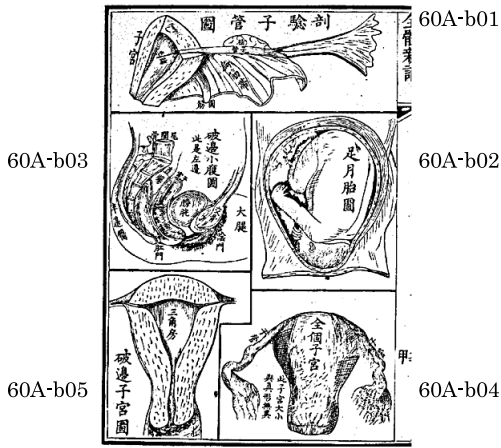
五十七ウ



六十甲才



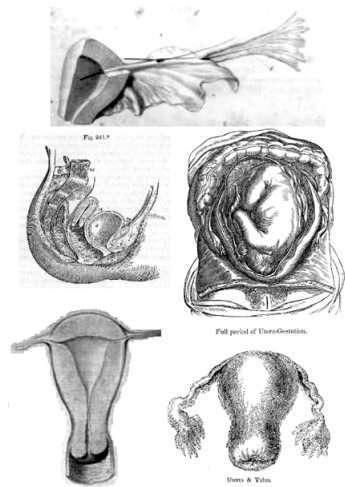
(参考)



60A-b01

60A-b03

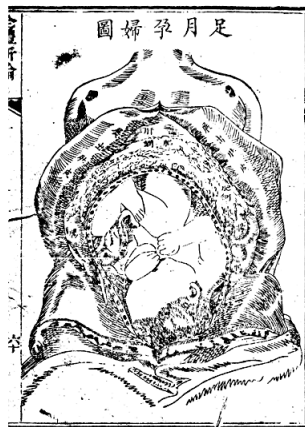
60A-b05



60A-b02

60A-b04

六十甲ウ



60B-a01

六十乙才

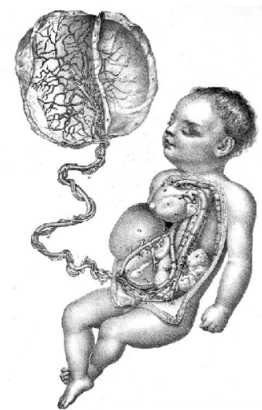


(参考)



60B-b01

六十乙ウ

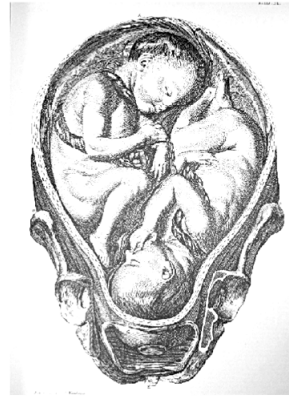


(参考)



60C-a01

六十丙オ



(参考)



60C-b01

六十丙ウ



(参考)

剖生理学は、旧態依然の銅版画ないしリトグラフの頃の形式によるものであるのだ。

さらに、脳神経に関する記述についてみれば、『全体新論』では9対に分類する17世紀のウィリス(Thomas Willis, 1621-1675, 英)以来の説を踏襲し、第7対が2対に分かれることを辛うじて述べるに止まっている。現在の解剖学では12対を数えるが、これはゼンメルリンク(Samuel Thomas von Sömmerring, 1755-1830, 独)によって1778年に確定されたもので、旧説の9対における第7対が2つに分かれて顔面神経(第VII脳神経)と内耳神経(第VIII脳神経)となり、第8対が3つに分か

れて舌咽神経(第IX脳神経)、迷走神経(第X脳神経)、副神経(第XI脳神経)となったものである<sup>27)</sup>。1850年代までにドイツ語圏の解剖学書では12対の脳神経を区別している<sup>28)</sup>。英語圏とフランス語圏の解剖学書では、通説として知られている9対の脳神経を紹介しながらも、実質的に12対の脳神経を区別しており、また9対と12対の対応も明確にしている<sup>29)</sup>。

一方、ホブソンは第8対が3対に分かれることには触れていない。ホブソンは脳神経に関して、主要な出典であるウィルソン、およびカーペンターの主旨に明らかに反した内容を『全体新論』

で伝えたこととなる<sup>30</sup>。また、本稿で検討したB群、およびC群の出典の中で、脳神経を論じているものをみても、そのほとんどが旧説の9対に併せて新説の12対を明確に示したものとなっている<sup>31</sup>。さらに、ホブソンが後に編纂した『医学英華字釈』(1858)においても、依然として旧説の9対のみを説明するのみである<sup>32</sup>。つまり、ホブソンは近代中国にとって新たな概念となる神経系の内容についても、その重要性について明確に認識していたとはいえ、引用した解剖図にある本来の意図を含めて十分に精査することなく、あくまで概要を伝える意図で『全体新論』を編纂したことがわかる。

先述した従来の研究で度々取り上げられてきたWylie(1867)では、『全体新論』の書名を“*Treatise on physiology*”(生理学に関する論文)と英訳して紹介している。しかし、これまで取り上げられることのなかったThe British and foreign medico-chirurgical review(1852)では、それよりも早い時期に『全体新論』を紹介しており、書名を“*An outline of human physiology*”(人体生理学概要)と英訳している<sup>33</sup>。そのように『全体新論』があくまで生理学、ないしは解剖生理学の概要を伝えたものであることは、後の『内科新説』でホブソン自らが述べている通りである<sup>34</sup>。ホブソンが去った後の近代中国において最も顕著な医療宣教活動をしていた米国人医療宣教師カー(John Glasgow Kerr, 1824-1901, 中国名; 嘉約翰)は、『全体新論』があくまで概要しか伝えていないことを批判しており、そうした状況を受けて、近代中国にはじめての本格的な人体解剖学の専門書として編訳されるに至ったのが、米国人医療宣教師オスグッド(Dauphin William Osgood, 1845-1880, 中国名; 柯為良)による『全体闡微』(1881)である<sup>35</sup>。そして、この書によってはじめて、脳神経を12対と数える新説が中国にもたらされるのである<sup>36</sup>。

また、先述のように、近代中国において西洋医学をいち早く取り込もうとした中国伝統の医家の一派に「中西匯通派」がある。その最も代表的な人物である唐宗海(1846-1897)は自著『中西匯通醫經精義』(唐, 1892)において、『全体新論』

に描かれる「週身血脈管図」を引用して掲載するとともに、この図が静脈を省略して描いていることに対して、西洋医学でも血管系を見分けることは困難である、と西洋医学の水準を批判しているように<sup>37</sup>、『全体新論』が西洋の解剖生理学を概略的にしか伝えなかったことが、かえって中国伝統の医家達に西洋医学の水準を誤解させる結果となったという一面もみられる。

#### 4. 『全体新論』の意図と意義

以上に論じてきたように、『全体新論』に掲載される解剖図は、その引用の図数からウィルソンの『人体解剖学体系』を最も主要な出典とすることがわかったが、この出典が人体の各部位ごとに図示しながら詳細に論述することを主旨としたものであることには注意しなければならない。これに対して、『全体新論』での意図はあくまで西洋の人体解剖学のおおよそを近代中国に伝えることにあり、そのことで西洋医学の最も基礎である解剖学の土壌を開拓し、西洋学問の気風を近代中国に根付かせようとしたのである。

そうした出典の背景を踏まえれば、ホブソンが『全体新論』の次に物理学・化学・生物学の概要をまとめた『博物新編』を編纂したこと、続いて、外科に関する内容を中心とする概説書『西醫略論』、産婦人科・小児科に関する概説書『婦嬰新説』、内科に関する内容を中心とする概説書『内科新説』を編纂していった上で、これらを併せて『西醫五種』のシリーズ本として完結させたことの最大の意図が何であったかを伺い知ることができよう。つまり、ホブソンは近代中国に西洋の近代的医学を伝えるためには、西洋の自然科学の学問気風を築くことが先決と考えたのである。西洋の近代的な癒しの術が、如何に西洋の最新の自然科学の土台上に成り立ったものであるか、そして、人の生命現象を含めた全ての自然科学の現象が、天地の創造主のなせる業であることを知らしめることを通して、動乱の近代中国に救いの手を差しのべ、自らの宣教師としての使命を果たそうとしたのである。そのことは、『全体新論』の最後に「造化論」「靈魂妙用論」の節を設けて、新

旧約聖書を引用しながら、専ら創造主と人の生命の意義を論じることで、この書をむすんでいることから明らかである。従って、ホブソンが専門レベルの医学を伝えるための解剖生理学書を主旨とせず、あくまで西洋の自然科学の気風を中国に伝えるための概要書として『全体新論』を編纂するに止めたことの最大の理由はまさにそこにあるのだ。

次に、『全体新論』で伝えられた西洋の解剖生理学が実質上、概説的に止まったことの直接的要因をみれば、それを十分に伝えるだけの中国語の体系を新たに創出しなければならないという課題が余りにも大きかったことがあげられる。ホブソンは『全体新論』において人体の各部位を表現するために暫時的に用いた中国語を、後に編纂の『医学英華字釈』（1858）の中で改訂の手を加えながらまとめている。しかし、それらホブソンによる語彙は必ずしも解剖学用語として相応しい形態を備えたものではなく、語彙数も不充分であった。そして、近代中国に本格的な解剖学用語としての中国語が十分な語彙数を伴って呈示されるのは、前述のオスグッドによる『全体闡微』（1881）を待つこととなる<sup>38)</sup>。つまり、西洋文明による医学体系を近代中国に根付かせるためには言語的障壁が存在したのであり、ホブソンはそれを容易に回避するために、西洋の様々な解剖学書・生理学書、さらには自然科学書等から多数の解剖図を引用することで、視覚的な面からアプローチする手法を試みたのである。そのことは、『全体新論』例言において、翻刻の際には細心の注意を払って解剖図を描いて欲しい旨が記されているように<sup>39)</sup>、ホブソンが特に解剖図の視覚面を重視していたことからわかる。そうした視覚面からのアプローチは、その当時の中国伝統医学の解剖学的知識との差を、詳細に描かれた西洋の解剖図を全面に出しながら明確に知らしめることで、中国人に対して啓発的に西洋学問の新たな気風を受け入れさせようとする意図のものでもある。そうした意図は、単に特定の出典に基づいて西洋の解剖生理学を訳述することを避け、西洋解剖学の歴史的事例・臨床的事例を随所に織り込み、中国伝統医学で独自

にいわれてきた解剖学的知識との違いを交えることで、西洋医学の優位性を主張しながら『全体新論』の本文が構成されていることから読み取ることができる。

そのように、ホブソンは『全体新論』の編纂を通して、近代中国における西洋学問伝播のイニシヤルとしての役割を果たそうとしたのであり、そこには、中国のごく一般の人々に対して、より幅広く分かり易いように、西洋の近代的な自然科学の潮流を伝えようとした心づかいさえ感じることができよう。しかし、『全体新論』に盛り込まれた医療宣教師ホブソンの異文明医学への誘いは、「中西医匯通派」を代表とする唐宗海をみる限り決して成功したとはいえず、むしろ、あまりにも概略的意図で解剖図が示されてしまったがために、漠然と理解するに止まらざるを得なかったのである。すでに日本においては山脇東洋（1706–1762）の『藏志』（1759）以降、解剖学的知識の追求を深めようとした新たな流れがあったように、『医林改錯』以降の近代中国における知的要求は、より高いところを向いていたのである。中国においては、陳定泰が自著『医談传真』（1844年成書、1875刊行）の中で、『医林改錯』に掲載される「親見臟腑図」に対しての検証を、西洋の解剖学書等に描かれる解剖図を直接にみて模写しながら行ったことは、その良い例である<sup>40)</sup>。

## むすび

本稿によって、『全体新論』に掲載される解剖図の最も主要な出典がウィルソンの『人体解剖学体系』であることが明らかになったが、『全体新論』そのものがウィルソンの『人体解剖学体系』に記される最新の解剖学の知識自体を伝える目的のものではなかったことも同時に結論づけられる。これまで明らかにされてこなかった出典にみる解剖図そのものが、新たな木口木版画による論述形式、あるいは新説の脳神経を詳論しているように、医史的に極めて重要な意義をもったものであることも改めて認識できた。しかし、ホブソンはそれら解剖図が本来備えもつ意義の多くを切り捨てることにより、西洋の近代的解剖学、ある

いは生理学のおおよその全体像を概説していったのである。前述の通り、西洋の外科に関する内容を中心に概説する『西医略論』は後に『西医五種』として、『全体新論』とともに刊行されている。『西医略論』には執刀をともなう外科の治療術を示した図等が多数描かれているのが特徴で、その中には若干の人体解剖図も掲載されているが、それは『全体新論』との併読を前提として編纂されたものである<sup>41)</sup>。その上で『西医略論』には、図によって概要は示すが、その実際の内容については詳論しないというホブソンの編纂における基本方針が明確に述べられていて、中国伝統の医家が倣うことを全く前提としていない<sup>42)</sup>。本稿での検討結果を踏まえれば、その基本方針が『全体新論』からの一貫したものであったことは明らかである。そうしたホブソンの基本方針が意味するのは、中国伝統の医家に対して、解剖学、あるいは執刀をともなう外科の治療術の習得のために両書が編纂されたのではなく、幅広く中国の人々に対して西洋医学の優位性を視覚的にわかりやすく主張しようとしたということである。

一方、日本の『解体新書』(杉田他, 1774)をみれば、図こそは本文と別刷りになってはいるが、解剖学書が図と照らし合わせて読まれることの意味が充分認識された上で、各項目ごとに記号をふりながらどの図をみるべきかを示して便宜を図った旨が明記されている<sup>43)</sup>。『解体新書』ではさらに、解剖学の各部位名の訳語を定める上での基本方針が明確に述べられていて<sup>44)</sup>、実際に訳出された語も全面的である。つまり、『解体新書』では解剖学書における解剖図が、外科の要を担うための位置づけにあることが充分認識された上で、漢方医・オランダ流外科医を含めた当時の日本の医者に対して、その自らの医術向上の用に足りるように、専門レベルでの解剖学習得が意図されていたのである<sup>45)</sup>。しかし、『全体新論』では教養レベルでの解剖生理学的内容が概説されるに止まっており、中国伝統の医家の実際的な医術向上に対する意図も非常に希薄である。従って、『全体新論』が中国で果たした役割は、『解体新書』が日本で果たした役割と同等ではなく、あくまで西洋

の自然科学の一分野としての教養レベルでの医学の伝播を担ったものとするのがより適切である。

それらを踏まえた上で判断する限り、中国における『全体新論』が、日本における『解体新書』と同等にして近代的西洋医学勃興の起点となったという従来の見方は過大評価であることがわかる。『全体新論』は専ら教養レベルでの概説的な西洋解剖学を伝えたに過ぎず、『解体新書』と同様に基礎医学構築の用に足り得るだけの専門レベルでの西洋解剖学が最初に中国にもたらされるのは、オスグッドによる人体解剖学の専門書『全体闡微』を待たなければならないのである<sup>46)</sup>。

## 注

- 1) 銭超塵, 温長路(2002) p.31.
- 2) 『医林改錯』「親見臟腑図」にはたとえば、肺・心・肝・脾・腎・胆・胃・小腸・大腸・膀胱・三焦、すなわち従来の「五臟六腑」を表すものに加えて、「賁門」(今日の噴門)、「幽門」(今日の十二指腸等)、「蘭門」(今日の回盲口等)、「遮食」(今日の幽門等)、「津門」(今日の十二指腸乳頭部等)、「津管」(今日の乳頭部胆管等)、「総提」(今日の肝十二指腸靱帯あるいは臍頭等)、「瓏管」(今日の主臍管等)、「精道」(今日の輸精管等)、「精孔」(今日の射精管等)、「溺孔」(今日の尿道等)、「氣管」(今日の動脈系の一部等)、および「血管」(今日の静脈系の一部等)などの語がみられる。
- 3) 中国伝統医学の流れを受けて、中西医匯通派はおもに臟腑に関する図を中心に引用している。引用の状況は、松本(2007a)参照。ただし、この稿では『全体新論』に掲載される図の出典が不詳であったために、図の数え方は本稿と異なる。
- 4) ホブソンと『全体新論』の概要、および日本における刊行等の周縁の状況については、吉田(1997) p.271-315参照。ただし、『全体新論』に記される医学的内容そのものが、日本の医学史にとって特別大きな影響力をもったわけではない。
- 5) 島田(2003)ではクエイン、ウィルソン共著『解剖学図譜集』(Quain, Wilson, 1842)のアメリカ版(1843)で検討し、これにある図の一部が出典である可能性を示唆するに止まっている。同論考では、和刻本『全体新論』を用いているが、そこで翻刻された図には、大小様々な異同がみられるため、図の厳密な同定は不可能である。特に、同論考で示唆された「腸部脈管図」「直割外腎図」は、細部の描かれ方の違いにより、出典は『解剖学図譜集』の図ではない。八耳(2003)ではこの論考を受けて、Quain, Wilson(1842)で検討

し、同様に出典の可能性を示唆するが、それは本論ではなく脚注での言及に止まる。

- 6) Wylie (1867), p. 126.
- 7) 一般に、中国・日本の各図書館の蔵書にみる合信・陳修堂撰・全体新論・咸豊元年(1851)は扉に、咸豊元年新鐫・全体新論・江蘇上海墨海書館蔵板。とあり、文末となる七十一丁裏には、羊城西関金利埠惠愛医館刊印。と記される。しかし、いずれの蔵書にも咸豊三年八月秋(1853年9月3日-同年10月2日)につくる「贅」1丁があること、7枚にまとめられたリトグラフによる解剖図がないことから、再版本であることが判別できる。これまで、咸豊元年版とされているもので、咸豊三年の「贅」1丁を付さずに、リトグラフによる解剖図をもつものは未確認であり、それらは正しくは咸豊三年の再版本『全体新論』である。なお、咸豊三年の「贅」の文脈をみる限り、「贅」を付す以前までにリトグラフによる解剖図をもつ再版本が刊行されていたことが伺えるが、その年は特定できない。本稿において検討対象とする『全体新論』は咸豊三年の「贅」をもつ再版本とし、中国では国家図書館蔵本および上海図書館蔵本、ならび到北京瑠璃廠にある中国書店で入手の筆者蔵本、日本では龍谷大学図書館蔵本参照。
- 8) 『全体新論』例言の原文は「一是書図形。初就石版絵刷。故図中頗雜。今用木版。悉皆照類分編。」。
- 9) 和刻本等については、合信、石黒厚(1874)、および、合信、高木熊三郎(1874)参照。
- 10) リトグラフによる解剖図を付した Harvard-Yenching Library 蔵『全体新論』の扉も、新鐫咸豊元年(1851)・全体新論。江蘇上海墨海書館板につくり、咸豊三年(1853)につくる「贅」1丁が付され、文末となる七十一丁裏には、羊城西関金利埠惠愛医館刊印。と記される。本文、および図を集めた各丁も、『全体新論』再版本と全く同じである。
- 11) ただし、『全体新論』「贅」では、掲載される図の総数を271と数えている。この「贅」と同じ文面が『全体分図』(葉, 1853)の第八枚目にもある。『全体分図』は『全体新論』に掲載されるリトグラフによる図、および、木口木版画による図を全て集めて、リトグラフによって印刷し直したもので、全8枚からなる。図の総数を271と数えるのは、明らかにリトグラフによる図を含んだものであるが、木口木版画による図の数え方についても若干の異同がある(注22参照)。現存する『全体分図』については、Wellcome library(英国)に所蔵をみるのみであるが、第四枚目、および第五枚目は逸散している。第一枚目~第三枚目は『全体新論』の木口木版画による図、第六枚目~第八枚目は同じくリトグラフによる図が集められている。現存部分で判断する限り、『全体新論』における図の配列順序に従って描かれている。
- 12) 『全体新論』に『博物新編』、『西医略論』、『婦嬰新説』、および『内科新説』が加えられた『西医五種』は上海図書館蔵本参照(『西医五種』としての刊行年は不詳であるが、一般に、最も遅い『内科新説』の成書年をもって刊行年としている)。この『西医五種』の書名は、合信(つまり、ホブソンの中国名)の編纂者名とともに、『西医内科全書』(嘉, 1882)にある刊行広告に掲載されることから、遅くとも1882年までに刊行されたことがわかる。
- 潘仕成輯刊『全体新論』海山仙館叢書(1852)もあるが、そこに掲載される解剖図には大きな異同がある他、解剖学的誤りがある。再版本『全体新論』例言では「近見有数坊本。形図錯舛頗多。失却本来面目。閱者須当弁之。」と、誤りが多々ある図を含む模倣本が批判されていることから、本稿では潘仕成輯刊本については除外して論じた。
- 13) 『全体新論』には唯一、序において「集西国医譜参互考訂……撮要訳述成書顔曰全体新論」と述べられているのみである。なお、この文脈では『全体新論』が西洋医学書から要点を拾って訳述したものであることも示されている。
- 14) Medical Times and Gazette (1859), p. 555。「カーペンター『動物生理学』からの翻訳、およびクエイン、ウィルソン、ペイリーからの抜粋」とあるが、状況から判断して『動物生理学』本文の直訳ではなく、これについても抜粋・要約程度であり、おもに解剖図の引用を指して述べていることがわかる。また、後述のように脳神経についてみても、これら出典に反した内容を伝える等しており、その状況は明らかである。
- 15) 後の1848年に Animal physiology 単独での刊行本もみられるが、Popular cyclopaedia of natural science のシリーズ本のものとはほぼ同内容である。
- 16) クエイン『解剖学要論』Elements of anatomy (初版タイトルは Elements of descriptive and practical anatomy: for the use of students) は、初版(Quain, 1828)、第3版(Quain, 1834)で図を付さないことを確認した。図を付すものは第4版(Quain, 1837)、および第5版(Quain et al., 1848)を検討した。なお、第6版は1856年刊行であるために対象外とした。
- 17) クエイン、ウィルソン『解剖学図譜集』(Quain, Wilson, 1842)は、骨格・靱帯編(1836)、筋編(1837)、内臓編(1839)、血管編(1840)、神経編(1842)からなり、それぞれ単独での順次刊行後に集成されたものである。
- 18) ウィルソン『解剖学者必携』The anatomist's vade mecum: A system of human anatomy は、初版(Wilson, 1840)以下、第2版(Wilson, 1842)、第3版(Wilson, 1845)、第4版(Wilson, 1847)、および第5版(Wilson, 1851)の各版を検討した。
- 19) ウィルソン『人体解剖学体系』A system of human anatomy, general and special は第2版(Wilson, 1844)、

- 第3版(Wilson, 1847), および第4版(Wilson, 1851)の各版を検討した。
- 20) ベル, ブルーム共編『自然神学』Natural theologyは, 2巻構成のロンドン・ニューヨーク版(Bell, Brougham, 1836)の他, 2巻構成のボストン版(Bell, Brougham, 1839), および4巻構成のロンドン版(Bell, Brougham, 1845)の各版で検討した。
- 21) パクストン編『自然神学』は, Illustrations of Paley's natural theologyと題するオックスフォード版(Paxton, 1826), およびボストン版(Paxton, 1827), ならびにNatural theologyと題するボストン版Paxton(1829), およびボストン・ニューヨーク版(Paxton, 1831), ならびにPaley's Theology, with illustrations. natural theologyと題するボストン版(Paxton, 1837a)の各版で検討した。
- 22) 『全体新論』「贅」では, 掲載される図の合計を271と数えている。状況から判断して, 01A-b01の図を3, 10A-b01の図を8, 31-b01の図を2(耳小骨が2組描かれている)と数え, 加えて, リトグラフによる解剖図を49と数えたと考えられる。本稿表3で数えた図数212との異同はそのためのものである。
- 23) 31-b01, 38B-a02, 52-a01の各解剖図については, 出典にある2つの解剖図から合成したものとみられるが, 他に出典がある可能性も否めない。表2では, 合成したものとして各図を二分して出典の図数とした。そのため, 表2中の「図総数」でイタリック体で示した数は, 各出典の図数とに異同があることを示したものである。
- 24) 初版本『全体新論』に付されていたホブソンによる英文prefaceには, パリの解剖学をモデルとした旨が述べられており(The Chinese repository. 1851; v. 20, p. 538-539に転記されるホブソンによる当該preface参照), 解剖図の状況からCloquetが重要な出典の一つである可能性が高いと判断し, これを「B群」に分類した。出典が不詳の38A-a03, 60A-a09, および60B-b01については, Cloquetに近い解剖図があったために特に「D群」としてあげた。
- 25) 坂井(2008), p. 289-292。
- 26) たとえば, 『医宗必読』(李, 1637), 『増補医宗必読』(李, 1770), 『黄帝内经靈枢註證発微』(馬, 1805), 『馮氏錦囊秘録雜症』(馮, 1722)等で, 本文と同じ丁に「五臓六腑」の各図を描きながら, それらを有機的に論述していることが確認できる。
- 27) Hildebrand(2005)を参照。
- 28) たとえば, Bock(1843) vol. 2, p. 66-97, Hyrtl(1851) p. 604-627。
- 29) たとえば, Quain et al.(1848) vol. 2, p. 667-816, Gray(1858) p. 475-500, Cruveilhier(1851-1852) vol. 4, p. 602-729。
- 30) 表1で示したA群のその他の出典については, Quain-Wilsonでは旧説の9対に従って脳神経を数えてはいるが, その実質は新説の12対を概説している。
- Paley-Bell, Paley-Paxtonでは, 脳神経の詳細については全く論じていない。
- 31) 表1で示したB群・C群については, Bell, Cruveilhier, Yeoman, Dunglison, およびSollyで脳神経に関する詳細な記述があり, これらの中でYeomanのみが旧説の9対だけを説明するが, 他は全て新説の12対に言及している。
- 32) Hobson(1858), p. 10。
- 33) Highley(1852), p. 526。なお, この英文書名は木口木版画による解剖図が加わる前の『全体新論』に対するものであるが, 既述のように, 本稿で検討対象とした再版本の本文は, 初版本の本文と異同はないことから, 『全体新論』本来の性質を的確に表現したものである。
- 34) 『内科新説』(合信, 1858)序に「西国医理……全体新論略言其概。」とあることによる。
- 35) 松本(2007a), p. 39-41。
- 36) 松本(2007b), p. 561-562。
- 37) 『中西匯通医経精義』(唐, 1894)全体総論に「夫彼所以不廻廻血管者。以一来一廻。紛而難弁也。」とあることによる(文中「廻血管」とはホブソンによる訳語で, 静脈を指す)。
- 38) 『医学英華字釈』で示された解剖学に関する見出し語は791, 『全体闡微』巻末にまとめられた解剖学用語の見出し語は1733を数える。松本(2006), p. 12-16参照。
- 39) 『全体新論』例言の原文は「凡欲翻刻是書者。一切形図款式。皆宜細心雕鏤。因骨肉経絡部位岐微。縮作小図。僅如塵末。」。
- 40) 松本(2005), p. 87-88。
- 41) 『西医略論』(合信, 1857)序に, 『全体新論』との関係について「今更以此書相補而行。似於医理不無裨益。」とあることによる。
- 42) 『西医略論』(合信, 1857)例言に「後附鋸割手足等図。係西国習用之法。不得載。恐中医一時未能做行。姑不詳論。」とあることによる。
- 43) 『解体新書』(杉田他, 1774)凡例に「解体之書最重燭図譜而説焉。故各条必有図。共記符印以便観覧也。読者宜相燭而看也。勿忽諸。」とあることによる。
- 44) 『解体新書』(杉田他, 1774)凡例に「訳有三等。一曰翻訳。二曰義訳。三曰直訳。如和蘭呼曰価験驗者即骨也……余之訳例皆如是也。」とあることによる。
- 45) そうした意図は, たとえば『解体新書』(杉田他, 1774)凡例に「按解体瘍科之要。不可不知焉。諸証之所在。外此而無可知焉……故欲能進于医焉者。苟非淵源于此。則決弗能也。而我方之医。恬不知省者。果何心哉。宜矣其不成刮骨之功也。余故於蘭書之中。特拔是為翻訳範初学。」と, 杉田玄白自身を含めて明らかに医の道を志す者に対して述べられていることにもよく表れている。
- 46) なお, 『全体闡微』は木口木版画によるグレイの解



解剖書をおもな出典として、解剖図には詳細な部位名が直接的に書き込まれている他、本文も解剖図との有機的な論述がなされており、松本(2007b) p. 556. 図1は『全体闡微』のそうした状況を端的に示す良い例である。従って、『全体闡微』における解剖図の意義は、明らかに『全体新論』のそれと一線を画すものである。

## 参考文献

- Arnott N. Elements of physics, or, natural philosophy. vol. 1. Philadelphia: Carey & Lea; 1831.
- Bell J. and Bell C. The anatomy of the human body. in 4 vols., New-York: Collins and Perkins; 1809.
- Bell C. and Brougham H. Paley's natural theology, with illustrative notes. in 2 vols. London: Charles Knight; New-York: William Jackson; 1836.
- Bell C. and Brougham H. Paley's natural theology, with illustrative notes, with selections from the illustrative notes, in 2 vols. Boston: Marsh, Capen, Lyon, and Webb ; 1839.
- Bell C. and Brougham H. Paley's natural theology; with illustrative notes, in 4 vols. London: Charles Knight & Co.; 1845.
- Bock C. E. Handbuch der Anatomie des Menschen. 3rd ed., in 2 vols., Leipzig: Friedrich Volckmar; 1843.
- Carpenter W. B. Popular cyclopaedia of natural science, Animal physiology. London: Wm S. Orr and Co., Paternoster Row; 1843.
- Cheselden W. The anatomy of the human body. London: H. Woodfall, R. & J. Dodsley, R. Baldwin, W. Johnston, J. Richardson, S. Crowder, and Hawes, Clarke & Collins, 1763.
- Cloquet J. Manuel d'anatomie descriptive du corps humain, représentée en planches lithographiées. Paris : Chez Béchét jeune, Libraire; 1825.
- Conquest J. T. and Winn J. M. Dr. Conquest's outlines of midwifery; intended as a text-book for junior practitioners. a new edition. London: Longman, Brown, Green, and Longmans; 1854.
- Cruveilhier J. Traité d'anatomie descriptive. 3rd ed., in 4 vols., Labé, Paris; 1851-1852.
- Cruveilhier J. and Pattison G. S. The anatomy of the human body. New York, Harper & Brothers; 1853.
- Dunglison R. Human physiology. in 2 volumes. Philadelphia: Lea and Blanchard; 1850.
- Davis D. D. The principles and practice of obstetric medicine, in a series of systematic dissertations on midwifery, and on the diseases of women and children. vol. 1. London: Taylor and Walton; 1836.
- Gray H. Anatomy, descriptive and surgical. London: J. W. Parker & Son; 1858.
- Highley S. The British and foreign medico-chirurgical review. 1852; vol. 10.
- Hildebrand R. Soemmerring's work on the nervous system: a view on brain structure and function from the late eighteenth century. *Anat Embryol*; 2005: 337-342.
- Hobson B. A medical vocabulary in English and Chinese: 医学英華字積. Shanghai: Shanghai Mission Press; 1858.
- Hooper R. Physician's vademecum, or a manual of the principles and practice of physic. London: Henry Renshaw; Whittaker and Co.; S. Highley; Simpkin and Co.; Sherwood and Co; 1842.
- Hunter W. Anatomia uteri humani gravidi tabulis illustrada. Birmingham: Baskerville; 1774.
- Hyrtil J. Lehrbuch der Anatomie des Menschen, mit Rücksicht auf physiologische Begründung und praktische Anwendung. 2nd ed., Wien: Wilhelm Braumüller; 1851.
- Jones T. R. A general outline of the animal kingdom; and manual of comparative anatomy. London: J. Van Voorst; 1841.
- Jones T. W. A manual of the principles and practice of ophthalmic medicine and surgery. London: Churchill; 1847.
- Medical times and gazette. London: Churchill. 1859; January 1 to June 25.
- Paxton J. Illustrations of Paley's natural theology: With descriptive letter press, Oxford: J. Vincent; 1826.
- Paxton J. Illustrations of Paley's natural theology. With descriptive letter press. Boston: Hilliard, Gray, Little, and Wilkins; 1827.
- Paxton J. Natural theology: or, evidences of the existence and attributes of the deity, collected from the appearances of nature. Boston: Lincoln and Edmands; 1829.
- Paxton J. Natural theology: or, evidences of the existence and attributes of the Deity, collected from the appearances of nature. Boston: Richardson, Lord & Holbrook, and Crocker & Brewster, New York: Jonathan Leavitt; 1831.
- Paxton J. Paley's theology, with illustrations. natural theology: or, evidences of the existence and attributes of the deity, collected from the appearances of nature. Boston: Gould, Kendall and Lincoln; 1837.
- Paxton J. An introduction to the study of human anatomy. Boston: William D. Ticknor; 1837.
- Quain J. Elements of descriptive and practical anatomy: for the use of students. London: W. Simpkin and R. Marshall; 1828.
- Quain J. Elements of anatomy. 3rd ed., London: Taylor; 1834.
- Quain J. Elements of anatomy. 4th ed., London: Taylor and Walton; 1837.
- Quain J., Quain R. and Sharpey W. Elements of anatomy. 5th ed., in 2 vols., London: Taylor, Walton, and Maberly; 1848.
- Quain J. and Wilson W. J. E. A series of anatomical plates, in lithography, with references and physiological comments, illustrating the structure of the different parts of the human body. London: Taylor and Walton; 1842.
- Smellie W. Tabulae anatomicae. Accedit earundem explicatio

- cum brevi, de arte obstetricia, institutione, ad illustrandum. Nürnberg: Joh. Joseph Fleischmann; 1757.
- Solly S. Human Brain: its structure, physiology and diseases with a description of the typical forms of brain in the animal kingdom. 2nd ed., London: Longman, Brown, Green, and Longmans; 1847.
- The Chinese repository. The proprietors. 1851; v. 20.
- Wardrop J. Essays on the morbid anatomy of the human eye. Edinburgh: George Ramsay & co. for Archibald Constable & co., London: Murray; 1808.
- Wilson W. J. E. The anatomist's vade mecum: A system of human anatomy. 1st edition. London: Churchill; 1840.
- Wilson W. J. E. The anatomist's vade mecum: A system of human anatomy. 2nd edition. London: Churchill; 1842.
- Wilson W. J. E. The anatomist's vade mecum: A system of human anatomy. 3rd edition. London: Churchill; 1845.
- Wilson W. J. E. The anatomist's vade mecum: A system of human anatomy. 4th edition. London: Churchill; 1847.
- Wilson W. J. E. The anatomist's vade mecum: A system of human anatomy. 5th edition. London: Churchill; 1851.
- Wilson W. J. E. A system of human anatomy, general and special. 2nd American edition. Philadelphia: Lea and Blanchard; 1844.
- Wilson W. J. E. A system of human anatomy, general and special. 3rd American edition. Philadelphia: Lea and Blanchard; 1847.
- Wilson W. J. E. A system of human anatomy, general and special. 4th American edition, Philadelphia: Lea and Blanchard; 1851.
- Wylie A. Memorials of protestant missionaries to the Chinese: American Presbyterian mission press; 1867.
- Yeoman T. H. The people's medical journal, and family physician. vol. 3. London: George Vickers, Strand; 1851.
- 王清任. 医林改錯. 中国: 京都隆福寺胡同三槐堂書舖; 道光10年(1830)(中国中医研究院圖書館藏).
- 嘉約翰. 西医内科全書. 中国: 羊城博濟医局藏板; 1882.
- 合信. 陳修堂撰. 全体新論. 中国: 江蘇上海墨海書館; 咸豐元年(1851)新鐫. 咸豐三年(1853).
- 合信. 西医略論. 中国: 江蘇上海仁濟医館藏板; 1857.
- 合信. 内科新說. 中国: 江蘇上海仁濟医館藏板; 1858.
- 合信. 石黒厚訳. 全体新論訳解. 日本: 静觀堂版; 1874.
- 合信. 高木熊三郎. 全体新論訳解. 日本: 文榮堂; 1874.
- 合信. 全体新論. 重印. 中国; 1914.
- 合信. 全体新論. 上海詠記書莊總發行; 1914.
- 坂井建雄. 人体觀の歴史. 東京: 岩波書店; 2008.
- 島田和幸. 明治初期の解剖学書—中国より輸入された解剖書『全体新論』について. 形態科学2003; 6(2): 45-52.
- 杉田玄白〔他〕訳. 解体新書. 日本: [須原屋市兵衛]; 1774.
- 錢超塵. 溫長路主編. 王清任研究集成. 中国: 中医古籍出版社; 2002.
- 唐宗海. 中西匯通医經精義. 中国: 申江袖海山房; 1894. (上海圖書館藏).
- 馬蒔. 黄帝内經靈樞註證發微. 中国: 万曆十四年(1586)成書. 嘉慶十年(1805)刻本(南京中医藥大学圖書館藏).
- 馮兆張. 馮氏錦囊秘錄雜症. 中国: 康熙四十一年(1722)成書. 大文堂刻本; 嘉慶二十三年(1818)(上海圖書館藏).
- 松本秀士. 近代解剖学の萌芽における日中比較身体論. 或問2005; 9: 79-92.
- 松本秀士. 人体解剖学の専門書『全体闡微』の解剖学用語について. 或問2006; 12: 11-24.
- 松本秀士. ポストホブソンの西洋医学書. 或問2007a; 13: 31-46.
- 松本秀士. 清末刊行の中国文 人体解剖学書について. 日本医史学雑誌2007b; 12: 545-568.
- 八耳俊文. ウェルカム図書館蔵ホブソン文書を用いたベンジャミン・ホブソン(合信)伝. 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報2003; 11: 99-120.
- 葉遂. 全体分図. 中国: 兩広督署, 1853.
- 吉田寅. 中国プロテスタント伝道史研究. 東京: 汲古書院; 1997.
- 李中梓. 医宗必読. 中国: 崇禎十年(1637)刻本(中国中医研究院圖書館藏).
- 李中梓. 増補医宗必読. 中国: 三樂堂; 乾隆三十五年(1770)(南京中医藥大学圖書館藏).

## On the Sources of the Anatomical Illustrations Appearing in *Quanti-xinlun*

Hideshi MATSUMOTO<sup>1),2)</sup> and Tatsuo SAKAI<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Rikkyo University, Department of Letters, Course of Philosophy and Creative Writing

<sup>2)</sup>Juntendo University, School of Medicine, Department of Anatomy and Life Structure

*Quanti-xinlun* by Hobson is frequently considered to have introduced European scientific anatomy to modern China. It contains numbers of precise anatomical illustrations which surpass by far those found in the Chinese traditional medical books. The impact of *Quanti-xinlun* derived mainly from the optical effects based on the anatomical illustrations. The present study clarifies for the first time the sources of the anatomical illustrations as being mostly from Wilson's "A System of Human Anatomy" and Carpenter's "Animal Physiology". However in *Quanti-xinlun*, the editorial sophistication present in the source books was abandoned, with the result that the anatomical contents were extremely minimized. In view of modern Chinese medical history, *Quanti-xinlun* provided an outline of anatomical knowledge, rather than a text-book encompassing anatomical details. It is concluded that *Quanti-xinlun* was intended to introduce the European way of thinking at the level of popular science.

**Key words:** anatomical illustrations, *Quanti-xinlun*, Wilson's "Human Anatomy", Carpenter's "Animal Physiology", modern Chinese medical history